在日中国系留学生のサポート要請目標に及ぼす人口学的特性の影響

湯　永隆・深田博己

Influences of demographic variables on the support-gaining goals among international Chinese students in Japan

Yung Lung Tang and Hiromi Fukada

本研究の目的は、在日中国系留学生のもつサポート要請目標に及ぼす人口学的特性の影響を検討することである。本研究では、湯・深田・周（2004）のデータの一部を利用し、在日中国系留学生126名を分析対象として、勉学・研究領域で指導教官にサポートを要請する場面を設け、在日中国系留学生の人口学的特性とサポート要請目標との関係を数量化Ⅰ類で検討した。9つの人口学的特性は、各サポート要請目標を15～19%説明することが実証された。このことから、本研究で使用した9種類の人口学的特性が在日中国系留学生のもつサポート要請目標に影響する無視できない要因であることが証明されたといえる。また、効果性目標と個人資源目標に対する説明率が最も高かった。そして、サポート要請目標に最も広範な影響を与える人口学的特性は出身地域と専攻分野と英会話能力の3つであることが確認された。なお、年齢と在籍身分は、どのサポート要請目標にも影響を及ぼさないことが明らかとなった。

キーワード：在日中国系留学生、サポート要請目標、人口学的特性、サポート獲得場面

問　題

在日中国系留学生の留学目的

在日外国人留学生の留学目的を重要度の側面から測定した山本（1986）は、学習・研究領域の重要度が最も高いことを報告した。また、岩男・萩原（1988）は、外国人留学生が学位取得を主目的とし、日本語の習得や日本文化の理解を副次的な目的としていると指摘した。さらに、中国人私費留学生の留学目的を調査した岡・深田・周（1996）は、勉学領域と言語領域の重視度の方が交流領域や文化体験領域の重視度よりも高いことを見いだした。これらの研究結果から、在日中国系留学生を含む外国人留学生の留学目的は勉学・研究領域にあることが分かる。

在日中国系留学生の適応改善のためのサポート源

在日中国系留学生の適応とソーシャルサポートの関係を検討した周（1995）およびJou & Fukada（1995a）は、適応改善に対してサポートが重要な役割を果たすことを解明した。また、サポート源別に適応とサポートの関係を検討したJou & Fukada（1995b, 1996）は、在日中国系留学生の適応改善に対して指導教官からのサポートが最も重要であることを明らかにした。これらの研究から、在日中国系留学生の適応改善のための、最も重要なサポート源は指導教官であることが判明した。

在日中国系留学生のサポート獲得方略に及ぼす人口学的特性の影響

サポート不足の原因の一つがサポート獲得方略の不適切な使用にあると考えた周（2000）の研究からヒントを得た湯・深田・周（2002, 2003, 2004）は、在日中国系留学生のサポート獲得方略の使用を規定する要因について検討した。その中で、湯他（2002）は、指導教官と日本人学生に対して在日中国系留学生が利用する7種類のサポート獲得方略の使用可能性と使用経験に及ぼす16の人口学的特性の影響を検討した。その結果、7種類のサポート獲得方略の使用に対する16の人口学的特性の説明率（一致係数R^2）は、指導教官に対する使用可能性の場合11～21%、使用経験の場合9～20%、日本人学生に対する使用可能性の場合9～26%、使用経験の場合8～21%であった。さらに、湯・深田（2004）は、指導教官に対して在日中国系留学生が利用する7種類のサポート獲得方略の使用可能性に及ぼす9つの人口学的特性の影響を検討した。その結果、指導教官への7種類のサポート獲得方略の使用可能性に対する9つの人口学的特性の説明率は、16～22%であることが示された。湯他（2002）の結果と湯・深田（2004）の結果が比較可能な指導教官に対する方略の使用可能性に焦点を当ててみると、人口学的特性の説明率は、湯・深田（2004）の方が高い傾向が見られた。そして、湯・深田（2004）において各サポート獲得方略の使用可能性に及ぼす影響が最も大きかった人口学的特性は、来日後の期間と英語能力であることが証明された。以上の研究から、指導教官に対する在日中国系留学生のサポート獲得方略の使用可能性に及ぼす人口学的特性の影響は、大きいとはいえないものの、無視することのできないものであることが判明した。

在日中国系留学生の留学目的に及ぼす人口学的特性の影響

在日中国系留学生の留学目的を勉学領域、交流領域、文化体験領域、言語領域の4領域に分類した岡他（1996）は、領域別の留学目的重視度および留学目的達成満足度に及ぼす12の人口学的特性の影響を検討した。その結果、勉学領域の留学目的重視度に及ぼす影響は、滞在期間が有意であり、年齢、日本語能力、総収入が有意傾向にあった。また、勉学領域の留学目的達成満足度に及ぼす影響は、専攻分野が有意であった。

在日中国系留学生のサポート獲得方略使用状況での目標

サポート獲得の上位概念である承諾獲得の場面における目標構造に関して、Dillard, Segrin, & Harden（1989）は、第一次目標と第二次目標から捉える多目標理論を提唱した。第一次目標とは、相手から承諾を得ることを目標とする効果性目標を指し、第二次目標とは、承諾獲得場面において

副次的な目標となりうる自己価値基準目標、印象管理目標、対人関係維持目標、個人資源目標、覚醒制御目標という５つの下位目標から構成される。これらの目標の定義を表１に示した。第一次目標は承諾獲得方略の有効性に関連する目標であり、第二次目標は承諾獲得方略の適切性に関連する目標である。Dillard et al.（1989）の多目標理論の妥当性は、承諾獲得方略の性質には有効性と適切性の２側面が重要であるという深田(1998)、深田・戸塚・湯(2002)、Reardon(1981; Cody, Green, Marston, O'Hair, Baaske, & Schneider（1986）による）の指摘からも裏付けられる。

勉学・研究領域において指導教官に対して在日中国系留学生がサポートを要請する場面を設定した湯他（2004）よって、こうした場面で在日中国系留学生は、効果性目標と印象管理目標を最も強くもち、対人関係維持目標と自己価値基準目標を次に強くもち、個人資源目標と覚醒制御目標を最も弱くもつことが解明された。また、湯他（2004）は、Dillard et al.（1989）の多目標理論における６つの目標に対応させて、サポート獲得方略の６つの性質を仮定し、それぞれの目標を達成するのに必要な性質を多く備えている方略ほど、多く使用される可能性があることを実証した。

目的：サポート獲得場面における在日中国系留学生の目標に及ぼす人口学的特性の影響

サポート獲得場面において在日中国系留学生がもっている目標の概要については湯他（2004）で明らかになったが、そうした目標が在日中国系留学生の人口学的特性によってどのように異なるのかについては未解明な状態である。在日中国系留学生の人口学的特性は、留学目的（岡他, 1996）やサポート獲得方略の使用（湯・深田,2004; 湯他, 2002）に対してある程度の影響をもつことが実証されてきた。

したがって、本研究は、湯他（2004）のデータを再分析することによって、指導教官に対してサポートを要請する場面において、在日中国系留学生のもつサポート要請目標に及ぼす人口学的特性の影響を検討することを目的とする。

方　法

表1　各サポート要請目標の定義

各要請目標		各要請目標の定義
第1次目標	効果性目標（influence ）	自分の要請を被要請者に遂行してほしいという願望を指す。
第2次目標	自己価値基準目標（identity）	個人の道徳基準、生活の原則および個人的な好みから発生する。
	印象管理目標（interaction）	人によい印象を与えたい願望を表す。それによって、要請者はコミュニケーションのスムーズな進行を図り、被要請者の面子を害することを避けようと努力をする。
	対人関係維持目標（relational resource）	被要請者との人間関係を維持したい願望を意味する。
	個人資源目標（personal resource）	要請者が自分が持つ物質面と健康面の資源を維持したい願望を表す。
	覚醒制御目標（arousal management）	自分が対人的影響行動に出ることによって、あるいはその行動を予想することによって引き起こされる不安を軽減したいという願望を意味する。

調査対象者と調査手続き

方法については、湯他（2004）で詳細に説明したので、本稿では方法の要点と新たな情報のみを記述する。

在日中国系留学生220名を調査対象者として、調査票を配布し、126名から有効回答が得られた（有効回収率57.3%）。有効回収票の内訳は、①男性55名、女性71名、②平均年齢28.35歳、③中国大陸出身者108名、台湾出身者18名、④来日後の期間の平均2年7ヶ月であった。調査は、中国語簡体字版および中国語繁体字版の質問紙調査票を使用して、2004年3月10日から4月10日にかけて実施した。

質問紙調査票の内容

(1) サポート獲得場面

在日中国系留学生が、現在の指導教官に対して勉学・研究領域でサポートを要請する仮想場面を設定した。仮想場面は、「現在の指導教官に対して勉学・研究領域に関するサポートを求めるとき。例えば、研究や勉学の内容（レジュメ、研究計画、論文の作成など）や進め方について、指導をしてもらいたいとき；自分の研究能力や努力を認めて、肯定的な評価をしてもらいたいとき；試験、レポート、研究についての情報をもらいたいとき；など」と呈示した。

(2) サポート要請目標尺度

上記（1）のサポート獲得場面で在日中国系留学生がもつ目標構造を測定するために、Dillard et al.（1989）の作成した目標尺度を利用した。Dillard et al.（1989）は、アメリカの大学生を対象として、効果性目標、自己価値基準目標、印象管理目標、対人関係維持目標、個人資源目標、覚醒制御目標といった6因子（6目標）を含む目標尺度を作成した。Dillard et al.（1989）の目標尺度は6因子・25項目から構成されていたが、本研究では、各因子につき因子負荷量の大きい方から3項目を選択し、表2の18項目（6目標×3項目）の短縮版を使用した。

(3) サポート要請目標の得点化手続き

各サポート要請目標項目に関しては、「全く当てはまらない（1点）」～「非常によく当てはまる（4

表2　本研究で使用したDillard et al.（1989）の目標尺度の短縮版

6つの要請目標	項目
効果性目標	1. 私のしてもらいたいことをしてくれるように指導教官を説得することは、私にとって非常に重要だ。 2. 私は、この説得の試みを通じてほしいものを手にすることに強い関心がある。 3. この説得の結果は、私にとって個人的に重要だ。
自己価値基準目標	4. この場面において、私は自分の道徳基準に違反しないかと心配だ。 5. この場面において、私は自分の道徳基準の維持について関心がある。 6. 私は、自分自身および自分の価値観に忠実であることに関心がある。
印象管理目標	7. この場面において、私は、社会的に不適切と思われることを言わないように注意する。 8. 私は、この場面において何が適切で、何が不適切かを非常に意識する。 9. 私は、指導教官を説得する時に、ばかと思われたくない。
対人関係維持目標	10. 私は、望んでいたものを得るために指導教官との人間関係を損うような危険を冒したくない。 11. 私は、望んでいたものを得ることの方が指導教官との人間関係の維持よりも重要だ。 12. 私は、指導教官をひどく怒らせたかどうかを、あまり気にしない。
個人資源目標	13. もし、私が指導教官を悩ましつづければ、指導教官は私をひどい目に合わせるかもしれない。 14. もし、私が強く説得しようとしすぎたら、指導教官は私につけ込むかもしれない。 15. もし、私が説得を押し進めたら、身の安全が心配だ。
覚醒制御目標	16. この場面は、私を緊張させるような場面ではない。 17. 私を神経質で不快にする、この場面の何かが私を不安にさせる。 18. 私は不快になったり、緊張したりすることを恐れる。

表3　目標尺度の目標ごと得点の平均と（標準偏差）、要請目標得点に関するα係数

	効果性目標	自己価値基準目標	印象管理目標	対人関係維持目標	個人資源目標	覚醒制御目標
平均(標準偏差)	3.11(.59)	2.61(.51)	2.99(.52)	2.70(.62)	2.10(.49)	2.06(.67)
α係数	.71	.43	.46	.42	.48	.51

点)」の4段階評定によって測定した。目標尺度の信頼性を検討するために、α係数を求め、その結果を表1に示した。ただし、対人関係維持と覚醒制御のα係数（.30と.36）が低かったので、それぞれ項目10と項目16を削除し、α係数を求め、その結果を表3に示した。したがって、3項目あるいは2項目の得点の平均値をもって、それぞれの目標得点とした（表3)。得点が大きいほど、それぞれの目標を強く保有していることを示す。

(4) 調査対象者の人口学的特性

調査対象者の人口学的特性に関しては、湯他（2002）の質問項目を参考にし、重要度と答えやすさを考えながら、性別、年齢、出身地域、在籍大学、来日後の期間、在籍身分、専攻分野、英語による会話能力、日本語による会話能力の9側面から測定した。

結　果

本研究では、数量化Ⅰ類を使用し、人口学的特性が在日中国系留学生のもつサポート要請目標に及ぼす影響を検討した。

在日中国系留学生の要請目標に及ぼす人口学的特性の影響の概要

在日中国系留学生が指導教官に対して勉学・研究領域のサポートを求める場面において、効果性目標、自己価値基準目標、印象管理目標、対人関係維持目標、個人資源目標、覚醒制御目標を従属変数とし、性別、年齢、出身地域、在籍大学、来日後の期間、在籍身分、専攻分野、英語による会話能力、日本語による会話能力の9つの人口学的特性を説明変数として、数量化Ⅰ類による分析を6回繰り返した。数量化Ⅰ類の結果を表4に示す。

表4から分かるように、6つのサポート要請目標に関して得られた決定係数（R^2）は、効果性目標と個人資源目標において有意であり、覚醒制御目標において有意傾向であったが、自己価値基準目標、印象管理目標、対人関係維持目標においては有意ではなかった。決定係数の大きさは.15～.19であることが判明した。このことは、方略の使用可能性が9個の人口学的特性によって15～19%説明可能であることを意味する。本研究で使用した9種類の人口学的特性は、在日中国系留学生のサポート要請目標を決定する無視できない要因であることが証明されたといえる。

人口学的特性のサポート要請目標別影響

効果性目標に関しては、決定係数が.19で有意であった（$F_{(14, 125)}=1.85$, $p<.05$)。「出身地域」の偏相関係数が.24で有意であり、大陸出身の留学生の方が台湾出身の留学生よりも、効果性目標の得点が高かった。また、「英語能力」の偏相関係数が.26で有意であり、英語能力の高い留学生の方が英語能力の低い留学生よりも、効果性目標の得点が高いことが示された。そして、「日本語能力」の偏

表4 在日中国系留学生のもつサポート要請目標に及ぼす人口学的特性の影響：数量化Ⅰ類による分析の結果

人口統計変数（説明変数）			効果性目標			自己価値基準目標			印象管理目標		
アイテム	カテゴリー	度数	カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数	カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数	カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数
性別	男性	55	-.07	.12	.11	.04	.07	.08	-.03	.05	.05
	女性	71	.05			-.03			.02		
年齢	20～26歳	48	-.05	.16	.12	.00	.01	.01	-.05	.12	.10
	27～30歳	42	-.04			.01			.07		
	31歳以上	36	.11			.00			-.02		
出身地域	大陸	108	.36	.42	.24**	.33	.39	.26**	.32	.37	.24**
	台湾	18	-.06			-.06			-.05		
在籍大学	広島大学	58	.00	.00	.01	-.13	.24	.22*	-.08	.15	.13
	その他の大学	68	.00			.11			.07		
来日期間	2年未満	66	-.01	.03	.02	.10	.21	.18*	.04	.08	.07
	2年以上	60	.02			-.11			-.04		
在籍身分	学部生	16	-.07	.10	.04	-.04	.17	.09	-.10	.29	.14
	院生	94	.01			-.01			-.01		
	その他	16	.03			.13			.19		
専攻分野	文科系	55	.00	.13	.07	.08	.29	.17†	.04	.35	.22*
	理科系	56	-.03			-.02			.04		
	その他	15	.10			-.21			-.31		
英語能力	あまりできない	48	.05	.52	.26**	.09	.15	.14	.03	.35	.20*
	少しできる	64	-.12			-.06			-.08		
	かなりできる	14	.40			.00			.27		
日本語能力	あまりできない	18	-.28	.34	.19*	.10	.12	.08	-.13	.21	.18†
	少しできる	69	.04			-.02			.08		
	かなりできる	39	.06			-.01			-.08		
	重相関係数			.43			.39			.40	
	決定係数			.19*			.15			.16	

†$p<.10$ *$p<.05$ **$p<.01$

表4（続き）

人口統計変数（説明変数）			対人関係維持目標			個人資源目標			覚醒制御目標		
アイテム	カテゴリー	度数	カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数	カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数	カテゴリースコア	レンジ	偏相関係数
性別	男性	55	-.01	.02	.02	-.05	.09	.08	-.17	.30	.22*
	女性	71	.01			.04			.13		
年齢	20～26歳	48	.04	.18	.13	-.02	.03	.03	.00	.00	.01
	27～30歳	42	-.11			.01			.00		
	31歳以上	36	.07			.01			.00		
出身地域	大陸	108	.14	.16	.09	-.04	.05	.03	.25	.29	.16†
	台湾	18	-.02			.01			-.04		
在籍大学	広島大学	58	.10	.19	.13	-.06	.11	.12	-.06	.11	.07
	その他の大学	68	-.09			.05			.05		
来日期間	2年未満	66	.01	.02	.02	.16	.34	.30**	.13	.28	.21*
	2年以上	60	-.01			-.18			-.15		
在籍身分	学部生	16	.13	.15	.08	-.04	.12	.06	-.13	.18	.06
	院生	94	-.02			-.01			.01		
	その他	16	.01			.08			.05		
専攻分野	文科系	55	-.13	.18	.18*	-.03	.12	.10	-.14	.38	.17†
	理科系	56	.14			.05			.07		
	その他	15	-.04			-.07			.24		
英語能力	あまりできない	48	-.17	.44	.29**	.04	.07	.07	.16	.29	.21*
	少しできる	64	.18			-.03			-.13		
	かなりできる	14	-.26			-.02			.05		
日本語能力	あまりできない	18	.00	.11	.08	.09	.14	.09	.06	.25	.17†
	少しできる	69	.04			.01			.08		
	かなりできる	39	-.07			-.05			-.17		
	重相関係数			.39			.44			.43	
	決定係数			.15			.19*			.18†	

†$p<.10$ *$p<.05$ **$p<.01$

相関係数が.19 で有意であり、日本語能力の高い留学生の方が日本語能力の低い留学生よりも、効果性目標の得点が高かった。

自己価値基準目標に関しては、決定係数が.15 で有意でなかった（$F_{(14, 125)}=1.45$, *ns*）。ただし、「出身地域」の偏相関係数が.26 で有意であり、大陸出身の留学生の方が台湾出身の留学生よりも、自己価値基準目標の得点が高かった。また、「在籍大学」の偏相関係数が.22 で有意であり、広島大学以外の留学生の方が広島大学の留学生よりも、自己価値基準目標の得点が高かった。そして、「来日後の期間」の偏相関係数が.18 で有意であり、来日 2 年未満の留学生の方が 2 年以上の留学生よりも、自己価値基準目標の得点が高かった。なお、「専攻分野」の偏相関係数が.17 で有意傾向であり、文科系の留学生の方が文科系以外の留学生よりも、自己価値基準目標の得点が高い傾向にあった。

印象管理目標に関しては、決定係数が.16 で有意でなかった（$F_{(14, 125)}=1.54$, *ns*）。ただし、「出身地域」の偏相関係数が.24 で有意であり、大陸出身の留学生の方が台湾出身の留学生よりも、印象管理目標の得点が高かった。また、「専攻分野」の偏相関係数が.22 で有意であり、文科系と理科系の留学生の方がそれ以外の留学生よりも、印象管理目標の得点が高かった。そして、「英語能力」の偏相関係数が.20 で有意であり、英語能力の高い留学生の方が英語能力の低い留学生よりも、印象管理目標の得点が高かった。なお、「日本語能力」の偏相関係数が.18 で有意傾向であり、日本語で日常生活会話が少しできる留学生の方があまりできない留学生やかなりできる留学生よりも、印象管理目標の得点が高い傾向にあった。

対人関係維持目標に関しては、決定係数が.15 で有意でなかった（$F_{(14, 125)}=1.43$, *ns*）。ただし、「専攻分野」の偏相関係数が.18 で有意であり、理科系の留学生の方が文科系の留学生よりも、対人関係維持目標の得点が高かった。「英語能力」の偏相関係数が.29 で有意であり、英語で日常生活会話が少しできる留学生の方がかなりできる留学生とあまりできない留学生よりも、対人関係維持目標の得点が高かった。

個人資源目標に関しては、決定係数が.19 で有意であった（$F_{(14, 125)}=1.91$, $p<.05$）。「来日後の期間」の偏相関係数が.30 で有意であり、来日 2 年未満の留学生の方が 2 年以上の留学生よりも、個人資源目標の得点が高かった。

覚醒制御目標に関しては、決定係数が.18 で有意傾向であった（$F_{(14, 125)}=1.78$, $p<.10$）。「性別」の偏相関係数が.22 で有意であり、女性の方が男性よりも、覚醒制御目標の得点が高かった。また、「出身地域」の偏相関係数が.16 で有意傾向であり、大陸出身の留学生の方が台湾出身の留学生よりも、覚醒制御目標の得点が高い傾向にあった。そして、「来日後の期間」の偏相関係数が. 21 で有意であり、来日 2 年未満の留学生の方が 2 年以上の留学生よりも、覚醒制御目標の得点が高かった。「専攻分野」の偏相関係数が.17 で有意傾向であり、文科系・理科系以外の留学生の方が文科系の留学生よりも、覚醒制御目標の得点が高い傾向にあった。「英語能力」の偏相関係数が.21 で有意であり、英語で日常生活会話があまりできない留学生の方が少しできる留学生よりも、覚醒制御目標の得点が高かった。「日本語能力」の偏相関係数が.17 で有意傾向であり、日本語能力の低い留学生の方が高い留学生よりも、覚醒制御目標の得点が高い傾向にあった。

以上のように、サポート要請目標別に 9 つの人口学的特性がそのサポート要請目標に及ぼす影響

の方向は一貫していることが判明した。

人口学的特性の影響のまとめ

上記の結果を別の角度から見直すと、次のようなことが分かる。「出身地域」が大陸である場合、効果性目標、自己価値基準目標、印象管理目標、覚醒制御目標という 4 つのサポート要請目標の得点が促進される。また、「専攻分野」が文科系である場合、対人関係目標と覚醒制御目標の 2 つのサポート要請目標の得点が抑制され、自己価値基準目標と印象管理目標の 2 つのサポート要請目標の得点が促進される。そして、「英語能力」が高い場合、効果性目標と印象管理目標の 2 つのサポート要請目標の得点が促進されるが、「英語能力」が中程度の場合、対人関係維持目標の得点が促進され、覚醒制御目標の得点が抑制される。サポート要請目標に最も広範な影響を与える人口学的特性は出身地域と専攻分野と英語能力の 3 つであることが確認された。

「来日後の期間」が 2 年未満である場合、自己価値基準目標、個人資源目標と覚醒制御目標の 3 つのサポート要請目標の得点が促進される。また、「日本語能力」が低い場合、効果性目標の得点が抑制されるが、「日本語能力」が高い場合、覚醒制御目標の得点が抑制され、「日本語能力」が中程度の場合、印象管理目標の得点が促進される。「来日後の期間」と「日本語能力」という 2 つの人口学的特性が比較的多くの方略の使用可能性に影響することが分かった。

そして、「性別」は覚醒制御目標、「在籍大学」は自己価値基準目標、といった限定された特定のサポート要請目標に影響を及ぼすことが示された。なお、「年齢」、「在籍身分」は、どのサポート要請目標にも影響を及ぼさないことが明らかとなった。

考　察

サポート獲得目標に及ぼす人口学的特性の影響の概要

本研究は、湯他（2004）のデータを再分析することによって、指導教官に対して勉学・研究に関するサポートを要請する場面において、在日中国系留学生のもつサポート要請目標に及ぼす人口学的特性の影響を検討した。在日中国系留学生のもつサポート要請目標に対する人口学的特性の説明率は、15～19%であった。この説明率の大きさは、指導教官に対するサポート獲得方略の使用可能性に対する人口学的特性の説明率が 16～22%であると報告した湯・深田（2004）に比較すると、やや低いものの極めてよく類似している。これらの結果から、在日中国系留学生の様々な反応に対する人口学的特性の影響は、ある程度安定して広範囲に及ぶものと考えられる。

本研究では、決定係数が有意であったサポート要請目標は、効果性目標と個人資源目標の 2 目標であった。また、9 つの人口学的特性の偏相関係数の結果から、年齢と在籍身分以外の 7 つの人口学的特性は、6 つのサポート要請目標のうちのいずれか 1 つ以上のサポート要請目標に対して有意な影響を与えていた。影響範囲が一番大きかった英語能力は 4 つのサポート要請目標に影響を与えていて、次に、出身地域と来日後の期間の影響範囲が大きく、3 つのサポート要請目標に影響していた。そして、専攻分野の影響範囲が 2 つのサポート要請目標に及んでおり、性別と在籍大学と日本語能

力の影響範囲が 1 つのサポート要請目標に及んでいた。しかし、年齢と在籍身分はどのサポート要請目標にも影響を及ぼさないことが分かった。このことから、在日中国系留学生のもつサポート要請目標に及ぼす在日中国系留学生の人口学的特性の影響は、大きいとは言えないものの、無視することはできないであろう。

個々のサポート要請目標に及ぼす個々の人口学的特性の影響

次に、個々の人口学的特性が個々のサポート要請目標に及ぼす影響を考察する。ここでは、決定係数が有意であった 2 つの方略に限定し、しかも偏相関係数が有意傾向であった人口学的特性は無視して、有意であった人口学的特性の影響のみを取り上げて解釈したい。

出身地域が大陸の留学生の方が台湾の留学生に比べて、効果性目標が高いことが示された。これは、今回の被調査者の平均年齢（28.35 歳）から見ると、本調査対象である大陸出身の留学生の半数が大陸の「一人子」政策で生まれた子（69 人）であることが分かった。一人子の特徴としては、自己中心的で依頼心が強いといわれる。つまり、サポートを要請するとき、サポート源にサポートを遂行してほしいという願望が人一倍強いと思われる。こうした原因により大陸出身の留学生の方が台湾出身の留学生よりも、効果性目標の得点が高いと考えられるが、出身地域のカテゴリー度数の片寄りからこのような結果が生じた可能性も否定できない。

専攻分野が理科系の留学生の方が文科系の留学生よりも、対人関係維持目標の得点が高いことが示された。これは、理科系の留学生の方が文科系の留学生よりも、授業やゼミ以外での指導教官との接触時間が長いため、すなわち、理科系の留学生の方が実験や実習などを通して、指導教官とのかかわりが深いため、指導教官との人間関係を悪化させたくないという気持ちが強いからではないかと考えられる。

英語の会話能力が高い留学生は、低い留学生よりも、効果性目標の得点が高かった。英会話能力の高い留学生は、指導教官との意志の疎通が可能であることから、効果性目標を高くもつことができるのかもしれない。また、英語の会話能力が中程度の留学生の方がそれ以外の留学生よりも、対人関係維持目標の得点が高かったが、この点に関しては解釈が困難である。

日本語の会話能力が低い留学生は、日本語会話能力の高い留学生よりも、効果性目標の得点が低かった。日本語の会話能力の低い留学生は、指導教官に自分の気持ちをうまく伝えることができないため、効果性目標を高くもつことができないのかもしれない。この結果は、留学生に対する日本語教育の重要さを裏付けるものであると言えよう。

今後の課題

本報告では、在日中国系留学生の人口学的特性の役割について、サポート要請目標から検討し、彼らの人口学的特性が一定の働きをもつことを確認することができた。今後は、在日中国系留学生が勉学・研究領域で指導教官に対してサポートを要請する場面を設定したが、今後はサポート要請の領域を拡張することや、サポート源を拡張することによって、本研究で得られた結果の一般化を図ることが求められる。また、多目標理論から設定されたサポート獲得方略の性質の認知に対して、

在日中国系留学生の人口学的特性が及ぼす影響を検討することも今後の課題の1つになるであろう。

引用文献

Cody, M. J., Green, J. O., Marstron, P. J., O'Hair, H. D., Baaske, K. T., & Schneider, M. J. 1986 Situation perception and message strategy selection. In M.L. McLaughlin (Ed.), *Communication yearbook* **9**, Beverly Hills, CA: Sage. Pp.390-420.

Dillard, J. P., Segrin, C., & Harden, J. M. 1989 Primary and secondary goals in the production of interpersonal influence messages. *Communication Monographs*, **56**, 19-38.

深田博己　1998　インターパーソナル・コミュニケーション--対人コミュニケーションの心理学―　北大路書房　Pp.186-189.

深田博己・戸塚唯氏・湯永隆 2002　承諾獲得方略の使用に及ぼす方略の有効性と適切性の影響 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第三部（教育人間科学関連領域）, **51**, 143-150.

岩男寿美子・萩原　滋 1988 日本で学ぶ留学生：社会心理学的分析 勁草書房

周　玉慧 1995 受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討―在日中国系留学生を対象として― 心理学研究, **66**, 33-40.

周　玉慧 2000 ソーシャル・サポート獲得方策リストの作成 心理学研究, **71**, 234-240.

Jou, Y. H., & Fukada, H. 1995a Effects of social support on adjustment for Chinese students in Japan. *Journal of Social Psychology*, **135**, 39-47.

Jou, Y. H., & Fukada, H. 1995b Effect of social support from various sources on adjustment of Chinese students in Japan. *Journal of Social Psychology*, **135**, 305-311.

Jou, Y. H., & Fukada, H. 1996 Comparison of differences in the association of social support and adjustment between Chinese and Japanese students in Japan. *Psychological Reports*, **79**, 107-112.

岡　益巳・深田博己・周　玉慧 1996 中国人私費留学生の留学目的および適応 岡山大学経済学会雑誌, **27**, 25-49.

湯　永隆・深田博己　2004　在日中国系留学生のサポート獲得方略の使用可能性に及ぼす人口学的特性の影響　広島大学心理学研究, 4, 印刷中.

湯　永隆・深田博己・周　玉慧 2002 在日中国系留学生のサポート獲得方略の使用に関する研究 留学生教育, **7**, 1-26.

湯　永隆・深田博己・周　玉慧 2003 在日中国系留学生のサポート獲得方略の使用に及ぼす課題達成動機と関係維持動機の影響 留学生教育, **8**, 241-259.

湯　永隆・深田博己・周　玉慧 2004 在日中国系留学生のサポート獲得方略の使用可能性に及ぼす方略の性質の影響 留学生教育, **9**, 57-67.

山本多喜司　1986 異文化環境への適応に関する環境心理学的研究　昭和 60 年度科学研究費補助金研究成果報告書